

「取り残された一人のために」
ヨハネによる福音書 20 章 19-29 節

復活の日の夕方、弟子たちはユダヤ人を恐れ、家の戸に鍵をかけて閉じこもっていました。しかし、彼らを縛り付けていたのは物理的な扉だけではありません。主を見捨てて逃げ出したという「後ろめたさ」と「罪の意識」が、彼らの心を内側から閉ざしていたのです。「自分は赦されるはずがない」という絶望が、彼らを孤独の殻に押し込めていました。

そこへ、復活されたイエスさまが立たれました。主は拒絶の鍵を無効にして彼らのただ中に飛び込み、「あなたがたに平和があるように」と二度繰り返されました。さらに主は、ご自分の釘跡とわき腹の傷を見せられます。その無残な傷こそが、私たちの罪をすべて引き受け、神との和解をもたらした「平和の代価」の証しだったのです。弟子たちはこの圧倒的な赦しに触れ、救いの喜びに満たされました。

しかし、この場に一人だけ居合わせなかったのがトマスでした。仲間の証言を聞いた彼は、「釘跡に指を入れてみなければ、私は決して信じない」と頑なな態度を示します。

これは単なる猜疑心ではありません。自分だけが主との再会から漏れてしまったという「疎外感」、そして「もう二度と、期待して裏切られる痛みを味わいたくない」という「自己防衛」の叫びでした。彼は愛する主を失った悲しみのどん底で、信じたいのに一歩が踏み出せず、一人きりで震えていたのです。

イエスさまは、そんなトマスを放っておかれませんでした。八日後、主は再び現れ、トマスが密かに口にしていた「無茶な願い」をすべて知っていたかのように、ご自分の傷跡を差し出されます。

トマスが真に求めていたのは「証拠」ではなく、「主は自分を忘れていなかった」という確信でした。主の圧倒的な愛に包まれたトマスは、指を差し入れることすら忘れ、「わたしの主、わたしの神よ」と告白します。主は、取り残された一人のために、再び現れる労を惜しまない方なのです。

「見ないで信じる者は幸いである」。

この言葉は、トマスへの叱責ではありません。現代を生きる私たちへの最大の祝福です。私たちは、二千年前の弟子たちのように、イエスさまの体に直接接触することはできません。しかし、主がトマスを訪ねられたその愛は、今、私たちにも等しく注がれています。

救いとは、私たちが主を見る努力をすることではなく、「イエス・キリストが私を見てくださる」という真実に身を委ねることです。私たちはもう、交わりの外側で孤独に震える必要はありません。すでに主の眼差しの中に招き入れられているという確信を胸に、希望をもって新しい一週間へと遣わされていくのです。